

## 「流感ト混合ワクシン」ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/30677">http://hdl.handle.net/2297/30677</a>

## 流感ト混合ワクチンニ就テ

長岡市 諸橋 林 太郎

余ハ曩ニ十全會雜誌第二十四卷第六號ニ於テ感冒ワクチンノ効力ニ就テト題シ、是ガ豫防上更ニ進デ治療上ニ試用シテ其有効ナルコトヲ力説シタリ。即チ大正七年十一月校醫タル四郎丸尋常高等小學校生徒ノ半數タル二百五十人ニ向テ豫防ノ目的ヲ主トシテ二回注射ヲ行ヒタリ。而シテ其内五名ハ局部癢痒ヲ感ジ、十名ハ輕度ノ頭痛ヲ覺ヒシ外副作用ヲ認メズ。亦同時ニ三百六十名ノ一般希望者ニ施行シタルモ反應ヲ呈セズ。尙翌八年二月ノ第二次大流行ニ際シ注射セザルモノ大多數犯サレシモノ係ラズ、前記施行者ハ比較的感染スルモノ少ナシ。只生徒中二名一般者中三名ノ感染者ヲ認メタリシモ、共ニ輕症ナレバ頗ル良結果ヲ呈シタリ。又治療上ニ亘リテハ當時二十三ノ實驗例ヲ掲ゲテ表示セリ。

最初ヨリ多量一〇以上ヲ注射スルトキハ發病ノ早期程效力顯著ニシテ、僅カニ一回ノ注射ニ依リテ頭痛、咽頭、喉頭痛ノ諸症去リ、以後二回三回ト繼續スルニ從フテ解熱、呼吸困難、脈膊頻數大小ノ「ラツセル」等ハ直ニ消退ス。併シ表中二例ノ不良ノ轉歸ヲ執リシコトハ腎炎、及ビ結核性等ノ合併症ノタメ目的ヲ果スコト能ハザリシモノナリ。當時此報告ニ對シ頗ル疑問ヲ有スルモノ多ク、顧ルモノ從テ少ナク、諸説續出シ反テ興味ヲ以テ向フルニ至レリ。他日機會ヲ得テ追試セント思ヒタリシニ計ラズモ今回ノ世界的大流行ヲ來タシ種々實驗ヲ重ヌルコトヲ得タリシハ欣喜ノ至リトス。

余ハ大正八年十月八日散在性ニ本症ヲ認メタリ。當時何人モ流感トハ考フルモノナク寧ロ「バラチフス」初期ノ疑診ヲ置ケリ、其ノ症タルヤ突然惡寒、戰慄、熱發ヲ來タシ頭痛、口渴、咽頭喉頭痛、腹痛、食思缺損、惡心、聲音嘶嘎

眼球結膜充血ス、余ハ念ノタメ尿檢、血清反應ヲ試シモ變化ナシ、此處ニ於テ全然「バラチアス」、ワイル氏病等ノ念ヲ去リ專ラ流感トシテ治療セシニ數日ナラズシテ全治ス。次デ十二月二十日ニ至リ同様ノ患者數例ヲ見タリ、内一例ハ二十九日發熱翌日診スルニ重症ノ肺炎ヲ併發シ呼吸促進譫語ヲ發ス幸ニ二週ニシテ全治セリ。時年末ニ際シ越年ノタメ各地ヨリ歸省スルモノ陸續トシテ汽車ハ每常各車滿員ヲ呈シ、輸送力ニ不足ヲ生ジ、其ノ混雜名狀スベカラズ。殊ニ我が新潟縣ハ有名ナル出稼國ナレバ舊習トシテ年中ノ行事タル一家對顔祝福スベク他出ノ工女等ハ縣外ヨリ群ヲナシテ歸村シ、其數實ニ萬ヲ降ラズ。

是等工女ヨリ各地ニ猖獗セル惡疫ヲ土産トシテ持チ來リ、見舞フコトナキヤヲ懸念セシニ果セル哉菌攜帶者ハ歸宅ノ上舊情ヲ温メ且ツ談ズベク戸別訪問ヲナシ雜居ノ間ニ互ニ傳染シテ蔓延セルモノナラン。吾ガ長岡地方ニアリテ最も猛烈ナル來襲ヲ受ケ悲惨ナル情況ヲ呈セシハ栖吉村ニシテ就中東片貝、西片貝及ビ成願寺村ノ小部落トス。即チ前述ノ一例トシテ東都ヨリ歸村セシ工女等及ビ工女募集員等ノ一部ニ有菌者アリテ集合坐談ノ結果盛ニ病毒ヲ感受セシモノナラン。片貝村ト稱スルハ東、西ノ兩村ヲ合シテ戸數漸ク九十戸ヲ算シ從テ人口五百ヲ有スル小村ニ過ギズ。其中間ニ小學校及ビ役場等ヲ設置ス、然ルニ過半ハ同時ニ病毒ノ侵入ヲ受ケ小學校ハ斷然休校シ、各家庭ニアリテハ親子相抱キ床ニ就クモノ、老母ノ愛孫ヲ抱テ苦悶スルモノ、家庭全部同時ニ臥床スルモノ、朝ニ病ヲ得テ夕ニ死スルモノ、診ヲ乞フ暇ナキモノ、甚シキニ至リテハ一家全滅ノ悲ヲ語ルモノ、其殘酷ナル狀見ル人聽ク人何レモ皆異口同音唯涙流然トシテ感極マルコト之ヲ暫クスルノミ。今其一部トシテ少數ノ例ヲ列擧ス。

第一例 女、四十五歳、發病一月二十三日、初診二十五日、胃痙攣ノ主訴ニ依リ診ヲ求ム、呼吸困難、上腹部激痛、咳嗽喀痰頻發、脈搏百二十體溫三十九度八分、呼吸三十六、口渴甚シク呻吟ス、前胸部廣汎性水泡音ヲ聽取ス、早速本「ワクノン」一〇ヲ注入シ直ニ流感ナル旨ヲ告ケ、家族九人ニ向テ豫防注射ヲ行フ。二十七日共ニ第二回注射ヲ行フ、前者

ハ二十八日解熱シ家族ニハ幸ヒ感染者ナシ。然ルニ三十日ニ至リ下男二十六歳ハ注射ヲ等閑ニ附シ固辭シテ應ゼザリシニ突然發熱苦悶ヲ始ム、體溫四十度五分、呼吸四十、脈搏百三十、兩肺共ニ犯サレ心臟衰弱セルタメ三回注射ヲ行ヒ外ニ諸々ノ手當ヲ加ヘシモ其ノ効ナク遂ニ二月五日死ス。

第二例 二十九歳、女、發病一月二十三日、初診二十四日、體溫四十二度、脈搏百三十、頭痛激甚ヲ極ム即日一〇注射、廿六日一〇注射、廿七日解熱ス。家族三人ニ對シ二回注射ヲ行ヒタルニ豫防効ヲ奏シ其ノ後異常ナシ。只主人ノミ他醫ニ於テ一回注射ヲ受ケシニ感染シ廿八日ヨリ臥床シ一週日ニシテ治癒ス。

第三例 男、二十三歳、發病一月十九日、初診二十四日、肺炎重症ヲ呈シ白血、赤色痰、脈搏百三十、呼吸四十、體溫四十一度五分、大小便失禁ス、即日一〇注射シ、二十五日一〇注射セルニ夕刻死亡ス。家族三人ニ向テ豫防注射ヲ行ヒシニ感染者ナシ。

第四例 男、四十五歳、發病一月十五日、初診二十三日、平素ヨリ心臓内膜炎兼慢性胃腸加答兒ヲ有ス。脈搏百三十、細小、呼吸三十五、體溫四十度、兩肺犯サレ胃部激痛ヲ訴フ依テ「ヘバトキシリン」一〇「ヂキタミン」一〇「カンフル油」二〇「ワクチン」一〇ヲ注射ス。午後又激痛ヲ訴フ依テ「ヘバトキシリン」一〇「ヂキタミン」一〇「カンフル油」二〇「ワクチン」一〇ヲ注射ス。二十四日「ワクチン」一〇注射ス、二十六日全然解熱ス。家族四人ニ對シ豫防注射ヲ行フ感染者ナシ。

第五例 男、十八歳、發病一月十三日、初診十六日、右側肺炎、白血、赤色痰、喉頭部激痛、聲音嘶啞、體溫四十度、呼吸三十、脈搏百二十五、「ワクチン」一〇注射、十八日更ニ一〇注射、十九日解熱ス。同時ニ家族五人豫防注射ス感染者ナシ。

第六例 男、九歳、一月二十日發病、二十一日初診、右側肺炎、體溫三十九度五分、脈搏百三十、呼吸三十、咳嗽頻發苦悶ス、「ワクチン」一〇八注射、二十三日又一〇八注射セシニ二十四日解熱ス。家族五人豫防注射ヲ行フ患者ノ看護ニ勉メシ母二十六歳ハ二十八日發病シ兩側肺炎ヲ起シ咳嗽喀痰頻回、強度ノ腹痛及ビ胸痛頭痛甚シク嘔吐ス、體溫四十

度、脈搏百二十、呼吸三十五、呻吟シ意識稍不明ノ感アリ前後大小無數ノ水泡音ヲ胸部ニテ聽取ス併シ二週日ノ後ニ全治感染者ナシ。

第七例 女、三歳、發病一月二十三日、初診二十五日、咳嗽喀痰頻回 授乳困難呼吸促進迫ス服藥全然不能ニシテ體溫四十度、呼吸四十、脈搏百三十四、兩肺共ニ犯サレ輕度ノ膈症ヲ併發ス、毎日一〇注射ヲ行ヒシニ五回ニ至リテ解熱ス。家族四人豫防注射セシニ感染セズ、唯一人母ハ三月一日ニ至リ輕度ノ頭痛惡寒熱發ヲ來タセシモ頗ル輕微ニ經過ス。

第八例 男、九歳、發病一月十五日、初診二十二日、家族七人中五人同時ニ犯サレタリ本患者ハ重症肺炎ヲ呈シ胸膜炎ヲ合併ス爲メニ精神朦朧トシテ意識不明ノ点アリ口渴甚シク嘔吐下痢ヲ伴フ體溫四十一度、脈搏百三十、呼吸三十五ヲ算ス希望ニ依リ注射ヲ行ハズ翌日死去ス。尙十九歳ノ次男モ同症ヲ呈シ白血赤色痰ヲ咯出シ發汗頭痛甚シ毎日一〇參回連續注意セシニ解熱ス。他ノ二人モ全治ス同時ニ長男二十六歳及ビ三男十六歳ニ豫防トシテ四回ノ注射ヲ行ヒシニ軍篤者看護中何レモ感染者ナシ。

第九例 娘、十一歳及ビ母、三十五歳、共ニ發病一月二十三日、初診二十六日、體溫四十度、咳嗽喀痰頻發、口渴、聲音嘶啞、喉頭部激痛、呻吟苦悶ス、併シ「ワクチン」大量ニ注射三回連續セシニ全然解熱ス。家族三人豫防注射セシニ長男十八歳ハ第一回注射ノ翌日突然熱發肺炎ヲ呈ス前者ノ症狀ト全ク同シ更ニ二回注射セシニ下熱全治ス、他ノ二人ハ幸ニ感染セズ只未注射ノ下男三十歳二月五日發熱四十度、呼吸三十六、脈搏百三十、白血、赤色痰ヲ認ム早々一〇注射シ翌日又一〇注射セシニ頗ル良好ニシテ尙一〇重ネテ注射セシニ全ク解熱ス。

第十例 男、五歳、及ビ女、六十歳、發病一月二十七日、初診三十日、共ニ重症肺炎ニ罹リ即日死亡ス。家族五人皆同一ノ症ヲ呈ス隔日一〇

ヲ三回注射セシニ全治ス。

第十一例 女、四十一歳、發病一月二十九日、初診三十日、數日前近親ノ家族全部罹患臥床ノタメ稍々輕快ニ赴キシ五歳ノ男子ヲ暫時トテ保護ヲ依頼サレ辭スルニ語ナク萬事休シテ諾ス、果シテ保衛者ナリシタメ生後一ヶ月ノ愛兒ハ忽チ感染シテ五日後ニ死亡ス、其ノ葬會中母ハ俄然苦悶ヲ始メ人事不省ニ陥ル、呼吸淺在遲緩發、熱四十度、脈搏細小觸知困難直ニ家人ニ向テ危篤ニ頻シタル旨告知シ、「カンフル油」○「ワックス」○。注射ス、此ノ患婦ヲ抱キ慟哭セル老婆ニ對シ隔離セント欲シ再三其ノ身ノ危險ナルヲ告グシモ仲々諾スル模様ナク共ニ死スルモ厭ハズト云フ現場ヲ見ルニ至リテハ最早百計盡キ斯ク難居ニ依リテ漸次慢延ス翌日○。注射セシニ解熱シ幸ニ老婆モ感染セザリキ。

第十二例 最モ慘禍ヲ蒙リシモノニシテ家族八人全部同時ニ一月三十日罹患シ二月四日診スルニ皆同型重症肺炎ヲ呈シ何レモ死ニ類シ相次テ死亡シ諸々ノ處置ヲ施スト能ハザリシハ遺憾此ノ上ナシ。

第十三例 女、三十歳、第一回豫防注射ヲ經タル三日後即二月四日罹患ス六日初診更ニ一回注射ヲ施行セシモ十日死亡ス、尙夫三十三歳小兒三歳共ニ犯サレシモ治癒ス。

第十四例 女、十三歳、發病一月二十日、初診二十四日、熱發四十度、呼吸三十、脈搏百二十、聲音嘶啞一○。注射シ廿六日一○。注射ス二十八日解熱ス。家族四人注意セシニ感染セズ只未注射ノ若夫婦感染シテ十日間ニテ治癒ス、尙他ニ同様ノ數例ヲ有スルモ記載ヲ略ス。

(301)

今回流行セル分布ノ狀ヲ見ルニ吾ガ新潟縣ニアリテハ二月十日ノ調査ニ依ルニ、現在人口百七十三万五千九百三名中患者二万一千二十九名ニシテ内豫防注射ヲ行ヒタルモノ千四百七名、未注射ノモノ一万九千六百二十二名ナリ。此ノ中死亡者千四百九十二名ヲ出ス、二月二十八日ニ至リ患者三万

四千六百五十六人トナリ、死亡者二千八百七十四名ニ増加ス。死亡者ノ比例ハ八人二分トス全國ニテハ患者百九十五万六千八百七十二人ニシテ死亡者ハ四人七分五厘トス。故ニ新潟縣死亡率ハ全國ニ比シ如何ニ惡性猛烈ナリシカチ知ル、當時長岡市ニアリテハ人口四万二千ニ對シ罹患患者二千七十九人ニシテ、注射ヲ受ケシモノ二百三十八名、未注射ノモノ千八百四十一人ナリ、罹患ノ比モ回數ヲ重ナルニ從テ減少スルハ明カナリ。更ニ本縣ニテハ三月一日ヨリ八日マテ患者四千八百十六名ニシテ、八日當日ニ於ケル死亡率ハ十二人四分二厘ニ達シ、尙十日ニ至リテハ十三人五分一厘ニ増加ス。之レガ再調ニ於テ本縣罹患患者ハ一月一日ヨリ三月十日ニ亘リ三万九千九百九十七人、死亡者三千七百三十人ヲ算ス。全國ニテハ三月五日マテノ罹患患者二百十五万五千二百五十一人、死亡者十萬一千八百八十七人ニシテ死亡率ハ四人六分九厘ナリ。然ルニ前述ノ片貝村ノ如キハ戶數百戸未滿、從ツテ人口五百ノ小部落ニシテ罹患患者二百人ニ對シ死者二十人ヲ出ス。又之ニ隣接セル成願寺村ノ如キハ戶數三十戸住人六十ニ對シ罹患患者八十人ニシテ死亡者十四人ヲ出ス、其ノ死亡率ハ全國ニ比較スルハ實心ニ堪エズ尙附近ノ各部落皆同一ノ慘狀ヲ呈ス。以上ノ如ク猛烈ナリニモ係ラズ大正八年二月ヨリ三日ニ亘リテ全村同時ニ犯サレ當時豫防ニ治療ニ注射ヲ施行セシ土合村ニアリテハ今回ハ其ノ被害苦痛ト注射有效トヲ熟知シ個人的ニ率先シテ多クハ一月中ニ殆んど全部豫防注射ヲ行ヒタルタメ前述ノ慘禍ヲ免カレ數名ノ輕症者ヲ出セシニ止マリシハ全く天與ノ幸福ヲ受ケシニ依リシモノナラン。

尙妊婦ノ傳染病ニ罹ルヤ屢々流産早産ヲ招クアリ、流感ニ襲ハルヤ又同様ノ經過ヲ取リシトハ吾人ノ胸裏ニ記憶ヲ留ム、併モ妊婦ニシテ今回ノ流感ニ際シ豫防注射ヲ施シタルモノ極メテ少數ニシテ、一般的ニハ俗説ニ左右サレ却テ先年施行セシ「チフス」豫防注射ノ如ク考ヒ容易ニ諾スルモノナ

原著 諸橋II流感ト混合ワクチンニ就テ  
ク、必常流産ヲ招クモノト誤認シ之レガ了解ヲ求ムルニハ頗ル困難ヲ感シ

タリ、左ニ流感ト妊婦トノ關係ヲ示ス。

姓 名	年 齡	妊 娠 月 數	病 名	輕 重	治 療 日 數	流 産 有 無	轉 婦	注 射 回 數	初 妊 經 産
丸山ミナ	四十歳	3	インフルエンザ	輕	十四日	流産	良	二回	初妊、經産
佐藤ヨシ	十八歳	6	肺炎	重	十四日	無	死	一回	初妊
室橋ヨリ	三十八歳	3	インフルエンザ	輕	八日	無	良	無	初妊
家老ズギ	二十歳	10	インフルエンザ	輕	十日	無	良	一回	初妊
五十嵐スイ	三十八歳	10	肺炎	輕	八日	無	良	無	初妊
安原マス	四十歳	2	インフルエンザ	輕	九日	無	良	無	初妊
高野スイ	三十八歳	4	インフルエンザ	重	二十日	無	良	無	初妊
水澤スミ	三十二歳	10	肺炎	重	二十日	無	死	一回	初妊
猪俣トキ	二十二歳	4	肺炎	重	二十日	無	良	無	初妊
押見ミナ	二十二歳	3	肺炎	重	十五日	無	良	二回	初妊
茨木ヨシ	二十六歳	2	肺炎	重	二十日	流産	良	二回	初妊
土田トキ	三十歳	7	肺炎	重	三十日	早産	良	一回	初妊
木村カズ	三十二歳	4	肺炎	重	七日	無	死	一回	初妊
岡村キチ	三十歳	7	肺炎	重	三十日	早産	良	一回	初妊
熊倉キチ	二十八歳	2	肺炎	輕	七日	流産	良	一回	初妊
小林ソカ	二十四歳	6	インフルエンザ	輕	十五日	無	良	二回	初妊
近藤フシ	二十三歳	5	インフルエンザ	輕	十五日	無	良	一回	初妊
大宮ヨネ	二十二歳	7	肺炎	重	二十日	早産	良	一回	初妊
小林キイ	三十歳	4	肺炎	重	二十日	流産	良	無	初妊
北村ウメ	二十三歳	9	肺炎	輕	三十日	無	良	一回	初妊
小林サヨ	四十三歳	3	肺炎	重	三十日	流産	良	一回	初妊

余ハ注射時ニ當リテ第一回ニ於テ僅微ノ反應ヲ呈シタルヲ以テ第二回第三回ヲ嫌忌シタルモノ多數ヲ認ム、又往々注射直後ニ於テ發熱臥床スル人アルモ是レ其ノ人ノ個性ニ依リ注射藥ニ對シ反應ノ差違アルモノトス、又三回注射後ニアリテモ少數ノ感染者ヲ實驗ス、尙四回ヨリ六回ト注射ヲ施行セシモノニアリテハ一人モ感染者ナシ、然ルニ民間注射藥ノ奏効ヲ危ムモノ多々存スルモ主トシテ被術者ノ精神的作用、注射藥品及ビ其ノ分量ノ體質ニ對スル適否又時期ト場所トノ關係如何ニ依リテ著シク相違ヲ來タシ同時ニ注射ヲ受ケタルモノニ於テモ甲家ニテハ毫モ感受セザルニ乙家ニアリテハ注射後發病シテ死亡シタルモノ數例ヲ實驗ス。余ハ多クノ注射方法ヲ見ルニ寒風凜烈タル飛雪紛々タルノ時燈火ノ下ニ寺院又ハ學校ヲ借用シ火氣少ナキ冷室ニ於テ老若男女混合シテ雜談涕泣スルアリ、更ニ衆人ノ順次ニ從テ自己ノ席次ニ來ルヤ解帶裸體トナルヲ環視セル人ハ何人ト雖此ノ際危險ノ襲來ヲ恐ル、萬一群衆中ニ輕症ナルモ保菌者ノ潜伏期ヲ有スルモノアリト假定センカ忽チ甲乙ト漸次感染シ、又歸途冰雪ノタメ感冒ニ罹ルト

余ハ今回公私ノ需メニ應ジ注射セシ人員凡テ二千六百人ニ達セシモ感染シタルモノハ比較的僅少ニシテ著名ニ認メシモノハ六十名ニ過ギズ、尙注射人員ノ年齡ニ付テ見ルニ最低生後九十日ヨリ最高八十三歳ニ至ル、其ノ内ニテ注射ニ際シ副作用トシテ認ムベキ反應ヲ呈シタルモノハ五十人ヲ超過セズ、多クハ精神過敏ノ人又ハ主トシテ酒客ニシテ注射當日前後ニ於テ大酒スルトキハ惡影響ヲ來タス、尙大人ニ多クシテ小兒ニ副作用ノ少ナキハ考慮スベキ點ニシテ神經作用ノ然ラシムル處トス。何レモ皆一兩日ニシテ放任的ニ治療ス、尙本注射藥ハ試驗時代ニ屬スルヲ以テ他日研究ニ待ツコトハ勿論ナルモ今日ノ場合ニ在リテハ他ニ良法ナキヲ以テ之ヲ執ラザルベカラズ。余ハ其ノ奏効ノ確實ナルコトハ年來ノ經驗ニ徵シ明瞭ニ會得ス、殊ニ今回ハ「ワクシン」創製者タルドクトル坂上弘藏氏ハ各菌株數ヲ增加改良セラレ、更ニ「カター」性球菌ヲ加入セラレタルハ大ニ吾人ノ意ヲ強フスルニ足ル。

キハ即注射翌日又ハ數日ノ潜伏期ヲ經テ發病スルモノナラン。余ハ屢々各家庭ノ招待ニ應ジ溫暖ナル室ニ於テ注射ヲ施行セシモノニアリテハ副作用ヲ呈セシ人極メテ稀ナリ、三回注射後尤モ著名ニ感染シタル二例ヲ述ブ。

第一例 男、四十五歳、初診二月九日、本患者ハ身體虛弱ニシテ平素ヨリ心内膜炎ヲ有ス爲メニ一層困憊ヲ極ム、脈 百三十、體溫三十九度八分、呼吸二十五、口渴甚シク高度ノ頭痛食思缺損不眠ヲ訴フ治療ノ結果十日間ニシテ全治セシモ之レガ看護ニ從事セシ三回注射ヲ受ケシ要四十歳亦感染シ聲音嘶嘎、喉頭痛、耳鳴、外聽道疼痛、嚙下困難、頭痛甚シク脈搏百三十、體溫四十度、呼吸三十ヲ算シ二週日ヲ經テ治療ス。

第二例 男二十歳、發病二月廿一日、初診廿二日、重症肺炎ヲ起シ脈搏百三十、呼吸三十五、體溫四十度五分、譫語、腰痛ヲ發シ右耳後發赤腫脹ス不眠激痛ヲ訴フ咳嗽頻發赤色痰ヲ喀出ス二日後ニ至リテ二十四歳ノ主人及ビ二十二歳ノ妻同時ニ犯サレ前記ノ症ヲ呈ス何レモ二週日ニシテ離床ス皆良好ノ經過ヲ取レリ。

結論トシテ、豫防的ニハ、身體強壯者ハ可成の大量ヲ注射スルモ妨ゲナシ反之虛弱者神經過敏ノ人ニアリテハ四乃至六回ニ亘リテ少量ヲ數回ニ使用ス、分量ト回数ニ依テ感受者ヲ減ズ。治療的ニハ、初期ニ於テ尤モ奏効著明ニシテ末期ニ至リテハ効少ナシ、寧ロ行ハザルヲ良トス。又初回ヨリ大量ヲ使用スルトキハ解熱速カニシテ諸症候消散スルモ、少量ヲ試用スルトキハ經過緩慢ニシテ數日ヲ經テ漸ク解熱ヲ認ム。